セネガルにおけるフランス語教育

―多数の現地語と公用語の共存を目指して―

大　平　亜花莉

序論

現在フランス語を公用語としている国は 28 か国あり、そのうち 20 か国がサハラ以南のアフリカに位置している [1)]。これらの国は旧フランス植民地であり、教育や行政においてフランス語を使用している。さらにアフリカ諸国では多くの現地語（langues locales）が話されており、アフリカのフランス語公用語国は多様な言語状況にある。西アフリカに位置するセネガルもその一つである。セネガルはフランス語を唯一の公用語としており、加えて 25 の現地語を「国語」としている [2)]。本稿では、現在のセネガルの言語状況を確認し、教育への「国語」の導入に焦点を当て、セネガルにおけるフランス語教育の現状を明らかにすることを試みる。

1．セネガルの言語状況

1.1．セネガルの歴史

現在のセネガルが位置する地域にはかつていくつもの王国が存在しており、奴隷制が行われていた。それに目を付けたヨーロッパ諸国がアフリカに進出していく。まず 15 世紀半ばにポルトガル人がセネガルに到来し、金や奴隷の交易を始めた。この交易はオランダ､イギリス､そしてフランスに取って代わられ、17 世紀半ば以降フランスが交易の主導権を握った。フランスはサンルイ（Saint-Louis）とゴレ島（ Île de Gorée）を交易の拠点とし、そこからフランスの植民地行政府による支配が始まっていった [3)]。

1830 年に成立した七月王政のもとで、サンルイとゴレ島の奴隷以外のすべての住民にフランス市民権が与えられた。その後第二共和政のもとで奴隷制が廃止されると、奴隷が解放され「フランス市民」の数が増加していく。1872 年以降、サンルイとゴレ島を含む 4 都市が「コミューン（commune）」として認められ、そこで生まれるすべての者がフランス市民権を享受するこ

とになった[4)]。フランスは 1886 年、植民地化に最後まで抵抗していたセネガル沿岸部の有力国であったカジョール王国の王を殺害し、王国を崩壊させた。その後、1890 年からフランスはセネガル南部のカザマンス地域の「平定」にも進出していく。1895 年、西アフリカ全土に及ぶフランス植民地は「フランス領西アフリカ（AOF : Afrique Occidentale Française）」として確立され、こうしてフランスによる植民地化が完了した[5)]。

先に述べたように 1872 年以降 4 つの「コミューン」の住民にはフランス市民権が与えられたが、それ以外の農村部の住民には市民権が与えられなかった。こうして植民地支配下のセネガルでは、同じアフリカ人が 2 つに分けられるという「二重構造」が存在した。1945 年にはすべての植民地住民に選挙権が与えられたが、4 つの「コミューン」以外の住民に与えられた権利はフランス本国と同等のものではなかった。こうした都市部と農村部の違いは教育や行政においても見られ、独立後にも引き継がれていく。そして 1960 年 4 月 4 日[6)]、セネガルはフランス領スーダン（現在のマリ）とともに「マリ連邦」としてフランスから独立を果たす。その後 8 月 20 日にはマリ連邦を脱退し、セネガル共和国（République du Sénégal）になった[7)]。

1.2. 言語政策の変遷

1960 年の独立時に、憲法によってセネガルの公用語はフランス語であると規定された。1971 年には、当時セネガルで認知されていた 23 の現地語のうち主要な 6 言語（ウォロフ語、プラール語、セレール語、マンディンカ語、ジョーラ語、ソニンケ語）が「国語」として認められ、それらの表記法が定められた。同年、それらの「国語」によって成人識字を行うための「識字局（Direction de l'Alphabétisation）」が設置された[8)]。「国語」に関する大きな動きがあったのは、1976 年のことである。サンゴール大統領（Léopold Sédar Senghor, 1906-2001）は「国際フランス語評議会[9)]」の開会演説において、「小学校教育への国語の導入は、間違いなく、読み書きなどの基本的技能の習得を容易にし、さらには最初の外国語であるフランス語の教育を容易にする[10)]」と述べ、教育、行政への「国語」導入の原則を宣言した。これを受けて、教育への「国語」の導入が実験的に行われていく。

1981 年に開催された「教育国民会議」でも教育への「国語」の導入が問題となり、その後、諸「国語」間の位置づけが提案された。具体的には、ウォロフ語に「国民統一語（langue d'unification nationale）」の地位を与えること

が提案された。翌年には教育への「国語」導入の具体的な計画が発表されたが、この計画が実行に移されることはなかった[11)]。「国語」の問題とともに成人識字に関する問題が意識され始め、1990 年代には国際機関の援助を受けて、識字支援のためのプロジェクトが次々と展開された。

2001 年の新憲法では「国語」について新たな文言が加えられ、「セネガル共和国の公用語はフランス語である。ジョーラ語、マンディンカ語、プラール語、セレール語、ソニンケ語、ウォロフ語、そして今後書記体系を与えられるすべての言語を国語とする[12)]」と定められた。

1.3. 各言語の使用状況

Ethnologue（2022）によると、セネガルでは現在 31 の現地語が話されている[13)]。現地語には「国語」として認められている言語があり、1971 年の時点では「国語」は 6 言語であったが、2001 年には「今後書記体系を与えられるすべての言語」が「国語」として認められることになった。現在までに 25 の言語が「国語」として正式に認められており、そのうち 22 の言語がすでに成文化されている[14)]。

公用語であるフランス語は、行政や教育などで使用されている。セネガルの総人口は 15,256,346 人（2017 年）[15)] であるが、フランス語話者は 4,210,000 人である。そのうち第一言語話者が 100,000 人、第二言語話者が 4,110,000 人であり、フランス語話者のほとんどが第二言語としてフランス語を使用している。総人口におけるフランス語話者の割合は、約 28％である。

ウォロフ語については、セネガルにおける話者数は 12,208,000 人で、そのうち第一言語話者が 5,868,000 人、第二言語話者が 6,340,000 人である。総人口に占めるウォロフ語話者の割合は約 80％にのぼる。ウォロフ語はもともとウォロフ民族の言葉であるが、今ではその他の民族も第一言語としてウォロフ語を使用している。こうした現象は「ウォロフ化（wolofisation）」と呼ばれている。

ウォロフ語以外の国語の話者数は、多い順に、プラール語 4,150,000 人、セレール語 1,660,000 人、マンディンカ語 1,630,000 人、ソニンケ語とジョーラ語がどちらも 340,000 人である[16)]。主要な言語の話者数だけを見ても、セネガル人は二言語またはそれ以上の言語を使用していることが分かる。

続いて各言語の識字率を確認する。まず、言語に関わらず少なくとも一つの言語で読み書きができる 10 歳以上の人の割合は 45.4％である。最も識字

率が高いのはフランス語（37.2％）、次いでアラビア語（11.1％）、そしてウォロフ語（2.0％）である。ウォロフ語以外の国語の識字率はどれも 1％に満たない[17]。ウォロフ語は国民のほとんどが理解できる事実上の共通語となっているが、その識字率は極めて低いことから、ウォロフ語は主に口頭言語として使われていると考えられる。

2. 教育における言語状況

2. 1. 教育制度と就学状況

セネガルの言語状況を踏まえて、本章では言語と教育の問題について述べる。初めにセネガルの教育制度と就学状況を確認する。セネガルの教育制度は、正規教育（éducation formelle）と非正規教育（éducation non formelle）に分けられる。正規教育には、就学前教育、初等教育、前期中等教育、後期中等教育、技術教育･職業訓練、高等教育が含まれる。一方、非正規教育には、識字教育、基礎コミュニティ学校（ECB : écoles communautaires de base）、アラビア語教育などが含まれる。基礎コミュニティ学校は、学校に通っていないか早期に退学した 9 歳から 14 歳の子どもを対象とし、国語とフランス語による基礎的な教育を提供している[18]。

正規教育のうち、初等教育について詳しく確認する。初等教育は、CI (cours d'initiation) / CP (cours préparatoire) 、CE1 / CE2 (cours élémentaire première / deuxième année)、CM1 / CM2 (cours moyen première / deuxième année) の 6 年間で、それぞれ小学校 1・2 年生、3・4 年生、5・6 年生にあたる。初等教育修了資格（CFEE : Certificat de fin d'études élémentaires）によって初等教育を修了したことが証明される。

続いて就学状況を確認する。2019 年の就学率は、就学前教育 17.6％、初等教育 84.9％、前期中等教育 49.8％であった。初等教育における進級率は 85.71％、留年率は 3.68％、中退率は 10.61％である（2017 年）。また、CFEE の合格率は 55.51％であった（2018 年）[19]。中等教育への進学率は 73.9％で、初等教育を修了した生徒の 3 割近くが中等教育に進学していない[20]。以上のことから、初等教育を修了し前期中等教育へ進学することや、学習を継続することがセネガルの子どもたちにとって課題であると言える。

2. 2. アラブ・イスラム教育

非正規教育の一つであるアラブ･イスラム教育は、主に「ダーラ（daara）」

と呼ばれるコーラン学校（écoles coraniques）や、フランコ・アラブ学校（écoles franco-arabes）で行われる。ダーラには様々な形態があるが、コーランの暗記が一番の目的である。一方、フランコ・アラブ学校は、宗教教育に加えて公立の小学校と同じように6年間の教育を提供し、授業はフランス語とアラビア語で行われる[21)]。

セネガルではダーラなどの宗教学校で教育を受ける子どもたちは就学しているとみなされず、就学率に反映されてこなかった。しかし近年ではアラブ・イスラム教育の正規教育への統合が進んでいる。2011年には「ダーラ近代化支援プロジェクト（PAMOD : Projet d'appui à la modernisation des daaras）」が開始され、「現代のダーラ（daara moderne）」という新しい形態のダーラが導入された。現代のダーラは5歳以上を対象とし、教育期間は8年間である。初めは現地語で教育を行うが、4年目以降は現地語に加えてフランス語とアラビア語が教育の言語となる。コーランの暗記や宗教教育に加えて基本的な教育が行われるため、現代のダーラに通う子どもたちも教育を受けているとみなされるようになった[22)]。

2.3. フランス語教育の歴史

アフリカで最初にフランス語の授業が行われたのは、植民地時代のセネガルのサンルイにおいてであった[23)]。フランスから派遣されたジャン・ダール（Jean Dard, 1789-1833）は、1817年から1820年までサンルイ相互学校（école mutuelle de Saint-Louis）[24)] でフランス語教師を務めた。ダールは当初フランス語による直接教授を試みたが、なかなか成果が上がらなかった。その理由は多くの生徒が内容をよく理解せずにフランス語を読んでいたことだと知ると、ダールはセネガルで広く話されていたウォロフ語を用いてフランス語を教えることを試みた。しかし、ウォロフ語はまだ文字化されていなかったため、ダールはウォロフ語のアルファベットによる表記法を考案し、辞書と文法書を編纂した。

ダールはウォロフ語の単語をフランス語に翻訳しながら学ぶという方法を考案した。まず初級クラスでウォロフ語の単語の書き方を学び、上級クラスでは、習得したウォロフ語の単語に対応するフランス語を学ぶ。ウォロフ語を媒介言語として用いることで効率的にフランス語を学ぶことができるようになった。ダールは大きな成果を上げたが、健康上の理由からフランスに帰国することになる。ダールの教育法は教師が現地語について十分な知識を持

つことを前提としており、誰にでもできるものではなかったため、ダールの後任は成果を上げることができなかった。そしてダールが始めたウォロフ語を用いた教育法は 1829 年に終了し、それ以降再びフランス語のみを用いた教育が続いていく[25)]。

3. バイリンガル教育の推進

3. 1. 教育への現地語の導入

独立後もフランス語のみを用いた教育が引き継がれたが、現地語を用いた教育の必要性が意識され始め、様々な教育改革において現地語の導入が考慮されていく。Diouf（2019）によると、セネガルにおける教育への現地語の導入は大きく三段階に分けられる。第一段階では、1977 年から 1984 年にかけてテレビクラス（classes télévisuelles）と非テレビクラス（classes non télévisuelles）による実験が行われた。これは正規教育で国語を用いた最初の実験であり、国営テレビの Radiotélévision Sénégalaise（RTS）によるテレビ放送に基づいて国語を教えるというものであった。非テレビクラスは、ウォロフ語 3 クラス、プラール語 2 クラス、セレール語 1 クラス、ジョーラ語 1 クラスが開設された。テレビクラスは、ウォロフ語 10 クラスが開設された[26)]。

第二段階は、2002 年から 2008 年に実施された、「テスト施行（Mise à l'Essai）」と呼ばれる実験である。6 国語を対象として全国の 155 のクラスで実施された。この実験では CI（1 年生）の 10 月から 1 月までは国語のみを使用し[27)]、2 月からは口頭でのフランス語の使用が始まる。CP（2 年生）になるとフランス語の読み書きの学習が始まり、算数の授業でもフランス語を使用する。このように Mise à l'Essai は、初めは国語のみを用いて、段階的にフランス語とのバイリンガル教育に移行するという実験であった。

第三段階には複数のプロジェクトが含まれており、非政府組織や市民団体によるものが中心である。ここでは 4 つのプロジェクトについて説明する。1 つ目は、「開発のための研究と教育団体（ARED：Associates in Research and Education for Development）」によるバイリンガルプログラムである。ARED はアフリカ言語での質の高い教育を推進するための活動を行っている非政府組織である。このプログラムは初等教育の最初の 4 学年を対象とした、プラール語またはウォロフ語とフランス語のバイリンガルプログラムである。この実験は 2014 年から 2015 年にかけて行われ、10000 人以上の生徒が実験に参加した。ARED によるバイリンガルアプローチは、「同時バイリンガリズム

（bilinguisme à temps réel）」と呼ばれている。これは CI（1 年生）からフランス語を導入し、読み書きやその他の科目を国語とフランス語で同時に教えることに由来している。例えば 1 時間の授業の中で、前半は国語を用いて学び、後半はフランス語を使って復習・強化するという教育方法である。

2 つ目は、「サーフィ語推進協会（ADLAS : Association pour le Développement de la Langue Saafi）」による、セレール語方言のサーフィ語とフランス語のバイリンガルプログラムである。このプログラムは Mise à l'Essai の基本計画を用いて、2010 年から 2014 年にかけて 10 クラスで行われた。

3 つ目は、「多言語教育（EMiLe : Education Multilinque）」による、セレール語とフランス語のバイリンガルプログラムである。このプログラムは 2013 年から開始され、12 クラスが開設された。CI（1 年生）では基本的にセレール語を用いて教育が行われ、言語の使用割合はセレール語が 90% に対してフランス語が 10% である。CP（2 年生）ではセレール語 70%：フランス語 30%、CE1 と CE2（3・4 年生）ではセレール語 50％：フランス語 50％、そして CM1 と CM2（5・6 年生）ではセレール語 40%：フランス語 60% となる。このように EMiLe のプログラムは、初めは主にセレール語を用いて教育を行い、学年が上がるにつれてフランス語の割合を増やしていくというものであった [28)]。

4 つ目は「アフリカの学校と国語（ELAN-Afrique : Ecole et Langues Nationales en Afrique）」という、フランコフォニー国際機関（OIF）の支援のもとで 2011 年に開始されたプロジェクトである。これはサハラ以南アフリカのフランス語圏で初等教育におけるバイリンガル教育を発展させていくためのプロジェクトで、生徒の母語を基盤としつつ、フランス語での基礎学習を向上させることを目標としている。現在ではセネガルを含むアフリカの 12 か国が ELAN-Afrique に参加している [29)]。

3. 2. バイリンガル教育の効果

このような様々なバイリンガルプログラムを通して、初等教育において国語を使用することの利点が確認された。ここでは ARED の「同時バイリンガリズム」によるバイリンガルプログラムに着目し、バイリンガル教育の効果について検討する。

ARED のプログラムの目標は、バイリンガル教育を受けた生徒がフランス語のみによる教育を受けた生徒よりも優れた学習成果を示すことであり、実

際に目標としていた結果が得られた。学習成果の評価方法として 3 種類のデータが用いられた。1 つ目は、CM2（6 年生）の終わりにすべての生徒がフランス語で受ける CFEE（初等教育修了資格）の結果である。2 つ目は、「初級の読解の評価（EGRA : Early Grade Reading Assessment）」と「初級の算数の評価（EGMA : Early Grade Math Assessment）」である。これは口頭で行われ、基本的なスキルを検査するものである [30]。3 つ目は、国語とフランス語による作文の評価である。

まず 2018 年の CFEE において、バイリンガル教育を受けた生徒の成績は、すべてフランス語による教育を受けた生徒の成績よりも大幅に上回っていた。合格率を比較すると、すべてフランス語による教育を受けた生徒の合格率が 43.38％であるのに対し、バイリンガル教育を受けた生徒の合格率は 64.57％であった。

続いて、EGRA（読解）と EGMA（算数）でもバイリンガル教育を受けた生徒の成績がより優れていた。2017 年の EGRA（読解）の結果では、フランス語のみの教育を受けた生徒の平均点が 50.30 点なのに対し、バイリンガル教育を受けた生徒の平均点は 69.90 点であった。

そして作文による評価に関して、国語の作文では、フランス語のみの教育を受けた生徒の平均点が 6.39 点であったのに対し、バイリンガル教育を受けた生徒の平均点は 8.5 点であった。バイリンガル教育を受けた生徒はフランス語のみの教育を受けた生徒よりも国語での作文の能力が高いことが分かる。しかし、フランス語のみの教育を受けた生徒は、国語の読み書きを正式には学んでいないことを考慮する必要がある。フランス語の作文では、フランス語のみの教育を受けた生徒の平均点が 6.44 点であったのに対し、バイリンガル教育を受けた生徒の平均点は 8.23 点であった。バイリンガル教育を受けた生徒はフランス語の学習時間は少ないにもかかわらず、フランス語での作文の能力が高いことから、バイリンガル教育はフランス語の学習においても効果的であることが分かる [31]。

3.3. バイリンガル教育の現状と課題

セネガル政府は、これまで実施されたすべてのプログラムを調和させたバイリンガル教育のモデルを開発した。これは「セネガルにおけるバイリンガル教育の調和モデル（MOHEBS : modèle harmonisé d'enseignement bilingue au Sénégal）」と呼ばれ、このモデルに関する政策文書が 2020 年に採択された。

このモデルは、第一言語をより定着させることで学習や成績の向上を可能にするという考え方に基づいている。したがって国語はフランス語と同じように、初等教育の 6 年間を通して学習の対象であり、教育の言語として使用される[32]。MOHEBS では、最初の 2 年間は授業時間の 80％を国語の学習に充て、フランス語には 20％のみを充てることが推奨されている[33]。そして最終的には国語よりもフランス語の学習時間の方が長くなる[34]。また MOHEBS では国語とフランス語の使用状況は科目によって異なる。CI（1 年生）では全科目を国語で学び、算数以外のすべての科目において学年が上がっても国語の使用が維持され、初等教育の 6 年間を通して国語は教育の言語として用いられる[35]。

最後にセネガルのバイリンガル教育における課題について考察する。今後の課題として、「バイリンガル教育の中等教育への拡大」と「対象となる国語の拡大」という二つが考えられる。これまで様々なバイリンガルプログラムが行われてきたが、ほとんどが初等教育を対象としたものであった。中等教育にもバイリンガル教育が導入されれば、初等教育で国語とフランス語による教育を受けた生徒が、進学しても効果的に学習を継続できるのではないだろうか。「対象となる国語の拡大」については、これまで実施されたプログラムは主に最初に国語として認定された 6 国語が対象であり、20 以上ある国語の中でこれらの 6 国語は広く使われている言語である。現在、国民教育省は「2028 年までにすべての言語でバイリンガル教育を提供できるように取り組んでいる」[36] ようである。それには教材の開発や教師の養成など多くの課題が予想されるが、実現すればほぼすべての子どもたちが自らの母語でフランス語とのバイリンガル教育を受けられるようになると考えられる。

結論

セネガルでは、公用語であるフランス語、事実上の共通語であるウォロフ語、その他多数の国語、そしてイスラム教の言語であるアラビア語が使用されており、言語によって使用状況は異なっている。フランス語は教育において用いられ、学習の対象であると同時に教育の言語でもある。教育への国語の導入は長年にわたってセネガルの重要な課題となっている。現在、セネガルのバイリンガル教育は重要な局面を迎えている。長年にわたるバイリンガルプログラムの成果に基づいて、2020 年に「セネガルにおけるバイリンガル教育の調和モデル（MOHEBS）」が採択された。政府は初等教育において

このモデルによるバイリンガル教育を普及させようと取り組んでおり、2023年度以降に全国の小学校でのバイリンガル教育の導入が予定されている。セネガルのバイリンガル教育の今後の展開に注目したい。

注

1） https://observatoire.francophonie.org/qui-apprend-le-francais-dans-le-monde/le-francais-languedenseignement/afrique-subsaharienne-et-ocean-indien-tableaux-regionaux-enseignement/（2023 年 12 月 18 日閲覧）、マリは 2023 年 7 月の憲法改正により、フランス語を公用語ではなく作業言語とした。
https://www.agenceecofin.com/communication/2807-110747-mali-le-francais-n-est-plus-une-langue-officielle（2023 年 12 月 21 日閲覧）。

2） Diagne, M. (2017), p. 98.

3） 小川了（編）（2010）、22 頁。

4） 砂野（2007）、133 頁。

5） 小川、前掲書、24-27 頁。

6） Présidence de la République du Sénégal https://www.presidence.sn/en/presidency/independence（2023 年 11 月 15 日閲覧）

7） 砂野（2007）、前掲書、146-148、162 頁。

8） 砂野（2002）、101-102 頁。

9） 世界におけるフランス語の保護と統一を目的として 1967 年にパリで設立された団体。

10）砂野（2007）、前掲書、176 頁。Dumont, P. (1983), p. 205 より引用。訳は砂野によるものである。

11）同書、177-186 頁。

12）« La langue officielle de la République du Sénégal est le Français. Les langues nationales sont le Diola, le Malinké, le Pular, le Sérère, le Soninké, le Wolof et toute autre langue nationale qui sera codifiée. » (Gouvernement du Sénégal, https://www.sec.gouv.sn/publications/lois-et-reglements/loi-ndeg-2001-03-du-22-janvier-2001-portant-constitutionmodifiee, 2023 年 11 月 6 日閲覧)

13）Eberhard, D., G. Simons, & C. Fennig (eds.) (2022), p. 275.

14）Diagne, M., *op. cit*., p. 98.

15）ANSD (2018), p. 9.

16）Eberhard, D., G. Simons, & C. Fennig (eds.), *op. cit*., pp. 275-281.

17）ANSD (2014), pp. 71, 84.

18）Ministère de l'Éducation nationale (2003), pp. 16-19.

19）Ministère de l'Education nationale (2018), pp. 114, 119, 136.

20）ANSD (2022), p. 50.

21）Lewandowski, S. (2011), pp. 42-51.

22）Charlier, J. (2002), p. 103. Ministère de l'Éducation nationale https://www.education.sn/fr/standard/73（2023 年 12 月 4 日閲覧）

23）ジャン＝ブノワ・ナドー＆ジュリー・バーロウ（2008）、167 頁。

24）相互学校とは、学習進度別に生徒をクラス分けし、学力の高い生徒に他の生徒の指導をさせるという相互教授法を実践する学校である。

25）砂野（2007）、前掲書、134-137 頁。谷口、前掲論文、1-9 頁。

26）Diouf, P. B. (2019), pp. 139-144. Sylla, Y. (1991), p. 11.

27）セネガルの学校は 10 月から新年度が始まる。

28）Diouf, P. B., *op.cit*., pp. 145-147. Benson, C. (2020), p. 1402.

29）Organisation Internationale de la Francophonie, https://www.francophonie.org/enseignement-bilingue-elan-18（2023 年 12 月 13 日閲覧）

30）FHI360, Education Policy and Data Center, https://www.epdc.org/node/5355.html（2023 年 12 月 14 日閲覧）

31）Benson, C., *op.cit*., pp. 1407-1409.

32）Diouf, P. B., *op.cit*., p. 152. Organisation Internationale de la Francophonie (2023), p. 153.

33）BBC news afrique (2023/3/17) « Comment le Sénégal compte généraliser l'introduction des langues nationales à l'école élémentaire ». https://www.bbc.com/afrique/articles/c0d40xezx00o（2023 年 12 月 17 日閲覧）

34）Sud quotidien (2023/2/20) « Le Sénégal va expérimenter l'enseignement bilingue à la prochaine rentrée scolaire (officiel) ». https://www.sudquotidien.sn/le-senegal-va-experimenter-lenseignement-bilingue-a-la-prochaine-rentreescolaire-officiel/#（2023 年 12 月 17 日閲覧）

35）Diouf, P. B, *op.cit*., pp. 152-153.

36）BBC news afrique, *op.cit*.

参考文献一覧

Agence Ecofin (2023/7/28) « Mali : le français n'est plus une langue officielle » . https://www.agenceecofin.com/communication/2807-110747-mali-le-francais-n-est-plus-une-langue-officielle（2023 年 12 月 21 日閲覧）

ANSD (2014). « Rapport définitif RGPHAE 2013 ». https://anads.ansd.sn/index.php/catalog/51/download/83（2023 年 11 月 27 日閲覧）

ANSD (2018). « Population du Sénégal en 2017 ». https://www.ansd.sn/sites/default/files/2022-12/Rapport_population_2017_05042018.pdf（2023 年 11 月 19 日閲覧）

ANSD (2022). *Situation Economique et Sociale du Sénégal Ed. 2019*. https://www.ansd.sn/sites/default/files/2022-04/2-SES-2019_Education.pdf（2023 年 12 月 21 日閲覧）

BBC news afrique (2023/3/17) « Comment le Sénégal compte généraliser l'introduction des langues nationales à l'école élémentaire ». https://www.bbc.com/afrique/articles/

c0d40xezx00o（2023 年 12 月 17 日閲覧）

Benson, C. (2020). « An innovative 'simultaneous' bilingual approach in Senegal: promoting interlinguistic transfer while contributing to policy change », *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 25(4), 1399-1416.

Charlier, J. (2002). « Le retour de Dieu : l'introduction de l'enseignement religieux dans l'École de la République laïque du Sénégal », *Éducation et sociétés*, 10(2), 95-111. https://www.cairn.info/revue-education-etsocietes-2002-2-page-95.htm（2023 年 12 月 4 日閲覧）

Conseil Internationale de la Langue Française https://www.calameo.com/read/000903947cce7ad6991eb?authid=TAQQIsDLZdNm（2023 年 12 月 21 日閲覧）

Diagne, M. (2017). « Gouvernance linguistique et émergence socio-économique au Sénégal », *Sciences & Techniques du Langage, Revue du Centre de Linguistique Apliquée de Dakar*, Université Cheikh Anta Diop de Dakar, 10, 93-109. https://www.academia.edu/41558435/Gouvernance_linguistique_et_%C3%A9mergence_socio%C3%A9conomique_au_S%C3%A9n%C3%A9gal（2023 年 11 月 19 日閲覧）

Diouf, P. B. (2019). « Innovations pédagogiques pour l'intégration des langues nationales africaines dans l'éducation : quel état des lieux au Sénégal », 137-161. https://www.researchgate.net/publication/350358102_Innovations_pedagogiques_pour_l'integration_des_langues_nationales_africaines_dans_l'education_quel_etat_des_lieux_au_Senegal（2023 年 12 月 21 日閲覧）

Dumont, P. (1983). *Le français et les langues africaines au Sénégal*, Paris : ACCT-KARTHALA.

Eberhard, D., G. Simons, & C. Fennig (eds.) (2022). *Ethnologue: Languages of Africa and Europe, Twenty-fifth edition*, Dallas, TX : SIL International.

FHI360, Education Policy and Data Center https://www.epdc.org/node/5355.html（2023 年 12 月 14 日閲覧）

Gouvernement du Sénégal https://www.sec.gouv.sn/publications/lois-et-reglements/loi-ndeg-2001-03-du-22-janvier2001-portant-constitution-modifiee（2023 年 11 月 6 日閲覧）

Hugon, C. (2015). « Les *sëriñ daara* et la réforme des écoles coraniques au Sénégal : Analyse de la fabrique d'une politique publique », *Politique africaine*, 139(3), 83-99. https://doi.org/10.3917/polaf.139.0083（2023 年 12 月 4 日閲覧）

Lewandowski, S. (2011). « Politiques de lutte contre la pauvreté et inégalités scolaires à Dakar : vers un éclatement des normes éducatives ? », *Autrepart*, 59(3), 37-56. https://www.cairn.info/revue-autrepart-2011-3-page-37.htm（2023 年 12 月 4 日閲覧）

Ministère de l'Éducation nationale https://www.education.sn/fr/standard/73（2023 年 12 月 4 日閲覧）

Ministère de l'Éducation nationale (2003). « Programme de Développement de l'Éducation et de la Formation (Éducation Pour Tous) ». https://planipolis.iiep.unesco.org/en/2003/

programme-de-d%C3%A9veloppement-del%C3%A9ducation-et-de-la-formation-%C3%A9ducation-pour-tous-pdefept-3687（2023 年 12 月 21 日閲覧）

Ministère de l' Éducation nationale (2018). « Rapport national sur la situation de l'éducation, édition 2018 ». https://www.education.sn/sites/default/files/2019-08/RNSE%20_2018%20%20-DPRE_DSP_BSS-%20vf%20juillet%202019.pdf（2023 年 12 月 21 日閲覧）

Miske Witt & Associates International, USA for Dubai Cares (2018). « DC Senegal Workshop Findings ». https://arededu.org/wp-content/uploads/2021/07/DC-Senegal-Workshop-Findings_04.2019-FINAL-ENG.pdf（2023 年 12 月 17 日閲覧）

ジャン＝ブノワ・ナドー＆ジュリー・バーロウ (2008).『フランス語のはなし もうひとつの国際共通語』（立花英裕監修，中尾ゆかり訳），大修館書店.

小川了（編）（2010）.『セネガルとカーボベルデを知るための 60 章』，明石書店.

Organisation Internationale de la Francophonie https://observatoire.francophonie.org/qui-apprend-le-francais-dans-lemonde/le-francais-langue-denseignement/afrique-subsaharienne-et-ocean-indien-tableaux-regionauxenseignement/（2023 年 12 月 18 日閲覧）

Organisation Internationale de la Francophonie https://www.francophonie.org/enseignement-bilingue-elan-18（2023 年 12 月 13 日閲覧）

Organisation Internationale de la Francophonie (2023). La langue française dans le monde 2022, Éditions Gallimard. https://www.francophonie.org/sites/default/files/2023-03/Rapport-La-langue-francaise-dans-le-monde_VF2022.pdf（2023 年 11 月 25 日閲覧）

Présidence de la République du Sénégal https://www.presidence.sn/en/presidency/independence（2023 年 11 月 15 日閲覧）

Sud quotidien (2023/2/20) « Le Sénégal va expérimenter l'enseignement bilingue à la prochaine rentrée scolaire (officiel) ». https://www.sudquotidien.sn/le-senegal-va-experimenter-lenseignement-bilingue-a-la-prochainerentree-scolaire-officiel/#（2023 年 12 月 17 日閲覧）

砂野幸稔（2002）.「セネガル政府の言語政策の推移：1960 年から 2001 年まで」，『熊本県立大学文学部紀要』，熊本県立大学文学部，8(2)，99-114. http://rp-kumakendai.pu-kumamoto.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/1254/1/806_sunano_99_114.pdf（2023 年 12 月 20 日閲覧）

砂野幸稔（2007）.『ポストコロニアル国家と言語 フランス語公用語国セネガルの言語と社会』，三元社.

Sylla, Y. (1991). *Des Etats généraux aux classes pilotes: les langues africaines dans l'éducation au Sénégal*. Dakar : UNESCO. https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000218410.locale=en（2023 年 12 月 14 日閲覧）

谷口利律（2020）.「フランス植民地期西アフリカにおける初期植民地教育－ジャン・ダールと相互教授法に焦点をあてて－」，『学術研究：人文科学・社会科学編』，早稲

田大学教育・総合科学学術院，68，1-13．https://waseda.repo.nii.ac.jp/records/57863（2023 年 12 月 7 日閲覧）
UNESCO https://education-profiles.org/fr/afrique-sub-saharienne/senegal/~acteurs-non-etatiques-dansleducation#Typology%20of%20provision（2023 年 11 月 23 日閲覧）